

備後燃糸「備和」

18春夏向け販売強化

合繊糸との複合も提案

燃糸加工業の備後燃糸（広島県福山市）は、今年2月に開かれた「ジャパン・ヤーン・フェア」への初出展以降、和紙糸の自社ブランド「備和」（びんわ）の営業活動を強化している。異素材との組み合わせなど機能面での訴求のほか、自社の燃糸ノウハウを生かした高付加価値化を強調する。

ヤーン・フェアでは、織布業やニッターなど30社程度と商談ができ、その半数程度にサンプル系を出荷したという。現在、試織や試編み段階まで進んでいる。

光成明浩社長は「生地

になって備和の特徴が明確になるケースも多く、18春夏向けに間に合う期限となる9月ごろまでは営業を継続する」と方針を示す。自社の生産設備

を活用し、試織や試編みを経ての改良や専用糸の販売などにも迅速に対応できる点も訴求、採用につなげる。

合繊使いの糸と和紙糸を擦り合わせての提案も重視する。光成社長は「織り、編み工程ともに扱いやすくなり、さらに機能面や染色特性の違いな

ど、双方の糸の特徴が出しやすい」とメリットを指摘する。

これら異素材同士の燃糸だけでなく、太さの違いの異なる燃糸や撚り回数の違いなどを用い、燃糸工程で付与できる高付加価値化のノウハウを併せてアピールする。